

ゲームクリアと政治学

2006.4.14 ~ 2011.8.19

2012.5.1 加筆 ~正義二種~、修正 ~中庸観~*

永遠の都を求めるわけでもなく滅ぼしつくすわけでもない。

国家とは家から

家とは人から

我が家を創るという思いから

政策円是非矛盾非無矛盾

政策を作る前には政策無きゆえ無政策なり。正しい政策も間違っている政策もない。賄賂等を前提にしない。

政策が無いところを考えたらよいだらう。それこそが大事である。

~軍事力に関する考察~

備えあれば憂いなしである。軍隊は暴力と定義しよう。

非暴力非非暴力なり。力を適切に使用するの意。暴力とは無関係の所を目指すという力強い意志。自然状態では個人ならば非暴力（暴力をふるう相手無）。全体ならば暴力（規則無い状態で発生す）。美しい国とは個人勝手というわけでも全体主義というわけでもない。

上の美しい国とは、素晴らしい国の事である。

～自然法について～

古より（今も）賢人達が教えているように、自然の法とは因果応報である。別に難しい話ではなく、他の箇所にあるが、例えば自然を破壊してしまったらその土地に住めなくなってしまう。これは自分達が自然破壊したので食物が採れなくなってしまうのである。統治者とはこの自然法より支配する者で、盗みを犯した者に褒美を与えたらそれは不自然な事だ。因果を与えるのが統治である。

～宗教間平等政策～

安政圏に入るかどうかだけ考えたらよい。同じ名を語っていても中身は全然違う場合もあるだろうし、宗教政策で念頭に置かなければならないのは非暴力である。統制せよというのではなく、ただ非暴力かどうかだけを経典から確認すべき。暴力を肯定する文章が在ったならば、聖典に書いてある通りに実行したまでだという事になっては困る。非暴力を明記している教義かどうか安全かどうかをまずは第一に考えなければならぬだろう。宗教的な意義は、この神は真実かどうか等の議論、問題にしていない。

聖典中僅か部分的に暴力的な記述箇所が存在する場合は、該当する宗教の権威者による解釈を要求すべし。宗教の根本原理として暴力が不可分の場合は当然圏外と考える。

～政治政府～

国民にとって程よい政府の大きさの民主主義を掲げているので…

生前を政治で常時管轄するのは大き過ぎる。政府の対象ではない。
死後を政治で常時管轄するのは大き過ぎる。政府の対象ではない。
地獄を政治で常時管轄するのは大き過ぎる。政府の対象ではない。
天界を政治で常時管轄するのは大き過ぎる。政府の対象ではない。
気流を政治で常時管轄するのは大き過ぎる。政府の対象ではない。
念力を政治で常時管轄するのは大き過ぎる。政府の対象ではない。
占いを政治で常時管轄するのは大き過ぎる。政府の対象ではない。

～政教分離～

唯一絶対的な神を立て崇拝する者達の中には、政教分離と聞くと「何故私の神に触れないのか？」と言う者が必ずいるだろう。分離とは背徳で、言及しないのは不信心であるので快くは思えない。しかしそのように主張する君達も神殿を分けた。完全無欠の存在を愚か者である私に伝えようとする君は一体何者なのか。その剣で”全て”を愚者である私に伝える事が自分には出来ると君達は主張するが。つまりは説得上手な君達を”自由に”誰でも入れるように家の扉に鍵はかかっていないのである。

～中庸観～

誰々から始まったというわけでもないし、いついつ終わるといふ事もない。政治学的中観とは、生前と死後の両極端の回避でありそれゆえ因果性も園内に収まる程度まで意識的に削り落とされる。努力すれば社会的によい暮らしが出来るといふのは政治的な因果関係であり、努力すれば天国に行くといふのは極端過ぎるので不必要である（宗教学探求分野と考える）。つまり政治学中庸観の本質は政教分離でありゆえに宗教的平等は保全されよう。より好ましいよりおぞましい天地に介入せず、しかしだからこそ倫理学の発展は当然である。

表敬鬼神天地不介入なり。

*（ここに記載されている）鬼神とは、人間、宗教に出てくる神の類と捉えてよい。神の存在を別に否定も肯定もしていない。

因果論に端を発する身分差別に関する考察

或る社会において、彼は前世の行いが悪いので彼は奴隷階級であり…
これは極端な例である。国民は因果観に基づく出生差別を主張しているが果たしてどうか。そのように述べるならば、あえて困難な道を選ぶ場合は全く無いとは言い切れないではないか。

～食と倫理～

グルメという言葉もあるが、動物を手にかける人物より殺さない人物の方が優しいのであ

る。あれは食べてもいい駄目だなどと述べる気はないが、職業選択が可能ならばあえてその仕事を選ばなくともよいだろう。もし自分も食べ（別に自分が殺すわけではないが）るならば、諸事情によりそのような職業についている人物に出会った時に謝肉祭の準備を薦めてみるのがよいのではないか。感謝し彼の行く末を念じてやるのもよいだろう。

謝肉祭といっても別に気休め程度でしかない。彼がやれば祭りが成功すると仮定してみても、その彼が定まらないからである。

～政治任期について～

長短老若に偏り過ぎてはよくない。若（老）くしてやってはいけないという意味ではない。若過ぎれば浅く年を取り過ぎれば老害となるだろう。長過ぎれば油断怠慢墮落、不適格者世襲の害あり、短過ぎれば仕事を為せない。

～哲人政治～

国民を代表し政治を主導する者は貴族が好ましくそのように志すべきであろう。彼は聖と俗の中間に在るのだ。賢王から代を隔てれば愚王が産まれるように、貴族の子孫は必ずしも貴族ではないので、全ての国民に被選挙人を選出する権利が与えられるべきである。中ほどの節制を知るのが俗人との違いであり、愚者は目先の利益のみに従い行動するだろうし投票行為も同じである。国家とは理であるというわけではなく幻というわけでもない。非自非他である。愚者に選ばれた者達は己れの欲望の為に国民を欺く事を生業とする。

～性善悪に関して～

この世を見渡せば、悪行で逮捕される者達もいるし善行に努める者達もいる。環境次第でも人は善にも悪にも転ぶ。人間とは性来悪であるという分けでも善であるという分けでなく（非善非悪）、志善であり至善が美德とされる。善き先生との出会いが大事なのだ。

善とは美德であるが、修行林とは、今一度それを捨て去ると解してよい。善なる生活こそが人間のあるべき姿であるとは言っていない。至善とは美德である。

～正義二種～

正義には二種在り。人倫による正義と体制による正義である。先方は、志善であり至善が美德とされる。後方は、均衡による安定の事で、悪性から。

～文武～

古来より文官と武官が国家を統治してきた歴史がある。歴史物語でも、傑出した文官の智略と武官の武勇がもてはやされているが、中には両面に優れている文武両道の達者もいる。優れた文官は優れた武官に敬意を示すだろうしその逆も同じである。片方だけでも修めるのが困難を極めるゆえ両道など中途半端だという意見も多かろう。果たして君はどう思うか？若年者教育にも文武両道の方針が用いられる学校も多い。

…文武両道とは実に愉快であり、これによって政治哲学は一つの山を上り終えるのだ。そこから確固たる友愛の思想が生まれる。

そもそも国を治めるといっても、他国を暴力により踏みにじって自国の富を蓄えたところで何になるというのか。それは自国民の真の利益にはならない。

武道の究極は無敵の強さなれば、文武両道とは即ち、無政策と無敵が重なり無敵政策となる。敵はいないのでつまりは他国との友愛関係の構築という事になろう。中ほどから至る天下無敵、平天下とは世界を統べる平和の法であり、川の流れの如き自在にその姿を変え多様性を重んじる。

注)

自身の解釈と儒教の考えが同じであるとは言っていないし同じでもどちらでもよいのだ。例えば、「天」には儒教では儒教の解釈があるだろうし、ここでは、上、上空、空の意である。天視眼が空じたところに政治哲学の本質、政教分離が現ずる。もっと厳密に述べれば、政教非分離非非分離であるが、修行林運営と解されて問題ない。地が空じたところに（空地、即ち修行林）現ずる。

無政策ゆえに自然そのままであり、環境権も参照の事。

孔子の「孔」は穴の意で、「空」の類字である。教説が風化し仮に名だけ残るならば、一字で大事を表すと空である、残らなければまさしく空である、と考えていたのではあるまいか。偶々そのような姓であったにせよ、子としては穴が開いていると謙遜を示しているように思う他なく奥深い。聖人というのは思慮深い者なのである。

ここでの聖人とは社会通念上の意。先入観を排し、孔子に限らず古人を、誰々は聖人だ聖人ではない等、話題にしてみるのもよいだろう。

友愛の愛という感覚に違和感を覚えれば、互いに高め合うという次元の高い話に特にこだわらなくともよい。交友関係の意である。実際問題として、治国もままならないのに平天下を軽んじ、軍事侵略力をもって国富にしようという浅はかな輩が多くて困りものだ。

輝かしき政策に至れば円満なり。

～止政策～

「止」とは趣深き言葉である。人や物がそこに止まれば街が出来、川を止めればダムとなり、昔の街の景観等、人々の思いもとどまる。善きものを止めれば街も善くなる。

～止心～

一つのものに心が囚われている不自由な状態の事。

～国民主導思想を欺く詭弁について～

よく、頭が悪い輩が政治の事に口を出すな、のような類を耳にするがこのような説に怯んではならない。投票に来る国民が皆、法律、経済、行政運営等の学識者並であるわけはないからだ。民主主義ゆえに、主権者は非学非無学である。

～欲望考究～

国家の原動力となっているものは国民達の欲望である。それゆえに「欲望」について考えるのは非常に有益である。

～生命の不思議～

蟻のような小さい生き物を観察してみると、何故これほどまでに小さい生物がかのように複雑なのかとよく考えさせられる。生命について考えるのは非常に有益で、これより生き物に対する第二不殺生観が生まれるだろう。第一不殺生観は自分が殴られたら痛いのような理解を指す。

可能な限りなるべく殺さないように心がけるのが賢明であろう。

～最悪の中の一つ～

非難されるべき最も悪い事の一つとは、侵略の歴史が無い国家を軍事侵略する事である。次に悪いのは、改心し、長い間侵略を行っていない国家を攻め滅ぼす事である。

～私利益～

軍事に限った訳ではないが、他国戦略のような類の政策はつまらないものだ。我にも彼にも共利する根本こそ尊い。

別に他人よりよい暮らしをしようという考えを否定しているわけではない。他人を踏みにじるというのではやはり愚かしいではないか。

～道楽とは～

社会的なものであれ、自分で創り出したものであれ、後者は創造的な人物と評されるが、目標に向かって努力する過程の中にこそ楽しい生活が存在するものだ。目標を決めればそこまでが道となる。道なき人生は愚かしい。

～享樂的生活～

快樂に耽りすぎるのは良くない。物欲満たされ淫蕩極まりて国家衰亡す。

私にも心中魔が差し苦々しい経験があります故。心で一切邪淫を思わずという風では到底ありません。懺悔致しますと共に、悲惨な境遇のせいにさせていただきたい。申し訳ございません。

邪心が全く無いのが聖人であろうが、それは私には分からない境地なので答えようがない。無政策を極め尽くした先が聖人であるので政治の事には無関心となるだろう。それを解して善政へと導くのが中の人なり。孔子の人倫は安定圏に収まる政策であろう。孔子が聖人かどうかと問われても私には答えるに難しいが、達磨大師も「お前は何者だ？」と聞かれて「不識」と返答したとあるし、君が寝ながら考えても困難だろうが、聖人とは何ぞやと考え続けるのもいいだろう。

文化背景の影響を受けるし、私が老子より愚かでも、政治哲学と比較宗教行為それ自体が直ちに劣っているという事ではない。劣っているバッターがたまたま打ったらホームランだったという事もあるではないか。字面ばかりを追っては駄目だ。仏教も同じ事で、仏教と比較宗教を比べたら何故仏教の方が優れているのかね？仏陀と私を比較してそのように言われるのならばそうだが。仏教がそんなに優れているのならば、世界中で多宗派あるが、3つ仏教を比較してみたら比較宗教ではないか。

私とて今と30年後は同じではないし、大体同じような程度かもしれぬ。死んでしまっているかもしれないし、酔狂な事に興じているかもしれぬ。

上の政治の事というのは富国政策の事。我が国に富や食を集めようとはせず。孔子の徳も、”金庫を満たせ”等ではない。現状では国に富をもたらすのは良い政策という事になっているが、そこの所を自分で考えるのが極めて有益である。手法が重要なのであって、表面的な結果さえ良ければ問題無いという事では決してない。

～自殺について～

君は「死にたい」と言うが。

預言者でなくとも予め知っている事がある。

これからの未来、我が身に起きるだろう確実な事は死。

君は確かなものに惹かれているのだ。

武道者は真剣、即ち死の境地。

君は強さに憧れているのだ。

君は「何もしたくない」とも言う。
何もしないで瞑想に耽っている者もいる。
苦痛は長くは続かないものだ。そのように理解したのならば。
自分で作り出した、余計なものを打ち壊せ。
身軽になれ。自由になれよ。

～さらに死という甘味な夢について～

ゲーテは、

死せよ、成れよ！
この一事を会得せざる限りは、
汝は暗き地上の
悲しき客に過ぎず。
(ゲーテ格言集より)

と述べている。

しかしこの箇所を個々人がどのように解釈するかは自由だが、死んでしまったらそのまま死んでしまうでないか。厳密には生死の境の事を言っているのではないか。死にかかって死なないとは（よく生きてたなど）よほどの幸運の持ち主であり、君がそれを考えても仕方ない。そんなに興味があるのならばその道の修行をするしかないだろう。他人の死など”君には関係の無い（ここでは理解出来ぬの意）事”だ。

「死んだ後に天国で成れよ」とも解釈出来る。どのみち君に自殺を勧めてはいないだろう。それだと自殺したら天国に誰しも行くことになるだろう。「誰でも何にせよ死んだら天国へ」という風には解釈するのは厳しいものを感じずるし危険である。嘘ではなくとも妄想かもしれぬ。記憶違いかもしれぬし誤解しているかもしれない。

「死んでしまったらそのまま死んでしまうという」箇所は、別に宗教的な話題を否定している訳ではない。

宗教理解は経験を伴わないと誤解でしかなく苦痛を伴う。体得出来るかは未定だが、可能な事は求道即ち修行である。唯時が満ちるのを静かに待てという思想もあろうが、「死せよ」と積極的な心象だ。酒を飲んで快樂的な遊びをして待てというような受身的な感じはしない。

～奇跡と幻覚～

ここに2人死んだと主張する者がいたとして、彼らの体験は共通のものであると君はどのように判断するのか？

ここに2人神の奇跡を受けたと主張する者がいたとして、彼らの体験は共通のものであると君はどのように判断するのか？

奇跡ではなく、あまりにも圧倒的な、神が与えた幻覚を、そしてそれを打ち破る為の試練であるかもしれぬ。

第三者の君はどのように判断するのか？

与えたのは神ではないかもしれぬ。

神ではないものが与えた奇跡に類似するものかもしれぬ。

神ではないものが与えた幻覚かもしれない。

夢を見ているのかもしれない。

夢かもしれない。

「あの光この光」という類の店には気をつけよ。

～天国、天界に関して～

諸宗教にというか、常識的見地により善行、修行によって辿り着くという場所と解されている。ここでは非想非非想天を紹介しておこう。仏教では中道でありこれは天界に対する見解なので、本政治学で使われている中庸とは意味合いが違う。

無色界の第4天で天界諸天中の最高。ここに生まれる者は粗い想念の煩悩がないから非想というが、微細なものが残っているから非非想という。仏教以外のインド宗教では解脱の境地。仏教では迷いの境地。

(非想非非想天 広辞苑より)

詳細は比較宗教学に委ねるが、西欧文化にも中庸思想の影響は確認出来る。アリストテレス、コヘレトの言葉等を連想するだろう。キリスト教は西欧では権威であるが、しかし、東洋のように中庸の教義が明確に表層に提示されていないのを、中庸に至らない人間が記した、または浅い人間が記した書と解すべきだろうか、それとも中庸それ自体が浅はかであるとみるべきか(否)。ここでさらにもう一考、聖書といえば神秘主義的解釈が一般的だろう。つまり、中程は最高教義として伺い知れよと解釈してもよいではないか。

王座は宮殿の中央に。
王が通る道は右にも左にも偏りなく。

キリスト教芸術の最高傑作は何か？と問われれば、私は次のように答えるだろう。
それはキリストの十字架であると。
神秘主義を採用するならば、神への道が其処に密かに隠れているかもしれない。十字架と言えは彼らの教義の全てなのだから。

十字架を背負って丘を昇っていったキリストが歩んできた道とは？
それは慈善の道。

丘の上に十字架は建てられた。あの姿形を見よ。すると、天に向かってキリストの頭がその方角を示し、さらに彼の示している体は、右腕と左腕の中央線上にある。彼の足は彼らの聖地より僅かにだが浮かんでいるようにも思える。

つまり、もう一つの道。それは中程を通って天へ至れという事だ。

そのように考えると、東洋の中庸、中道の考え方と合致する所も多いではないか。この二つの至天道は古来より聖者達によって説かれているところである。

何だ？君は。キリスト教を無理矢理に東洋哲学と統合させようとしていると、そのように思うのか。だから私は解釈出来ると言っているだけではないか？

…それならば、もう一つ示そう。
正三角形を描いてみたまえ。そして底辺上から上へめがけて線を引いてみると、底辺上のどの点から引いた直線が直ちに一番高みに到達するというのか？
他の所から引けば、途中でぶつかり行き止まってしまうのだ。

旧新約聖書と東洋の聖典の記述内容に相違があるにせよ、イエスキリスト時代のユダヤ教にも禁欲的に荒野で活動した派もあったという事だし、自分で比較し深化させていく事こそ重大事なのだ、そしてその自由活動を保障するのが政治である。

～大切なもの～

彼は正直な事を言っていると仮に私が述べたら君はそのまま信じるのか？

他の者が同じ事を述べたら君はそのまま信じるのか？

あるいは夢であると私が述べたらそのまま信じるか？

深遠ではないと述べたらどうか。

所詮他人の話は他人の話である。

君は君なのだ。

そして君が一番大切にしているもの、しなければならないもの、

それは君自身だ。

～イジメは良くない～

仏教を参考にしても、

諸行無常

遠ざかり離れる

…

イジメられてどうにもしようがないと言うならば、何もその場所に固執することはない。

古代王の言葉でも、

裁判でえこひいきをするのは良くない。罪あるものを正しいと宣言するならすべての民に呪われ、すべての国にののしられる。

(箴言 旧約聖書)

正義を真摯に追求していた姿勢が読み取れる。そういった慈善や正義、公平の哲学を参考にすることもよいだろう。

～釈迦の出家と政教分離～

王国を捨て出家した釈迦から読み取れる、「二兎を追う者は一兎をも得ず」の精神が何とも心地よい。仏陀は国王座と求道の両立は難しいと思ったのであろう。出家行為それ自体が政教分離を示唆している。

中間者である人間世界の政治哲学は中庸が重んじられる。インドの出家は宗教側から政教分離を明示しているものであり中間に位置する所が修行林である。どんな場所でも問題ないが、友好の架け橋となるべく期待されよう。

悟りを開いた後、諸国で教えを説いているので政教は高い次元で一致するという見解もあろう。だから政教一致でよいというのは話のすり替えであって、それだと賢王制度になる（哲人政治の箇所を参照の事）。王政が世襲ではなく禅譲をとったにしろ、例えば諸宗教教団の歴史を見ても、権力闘争、分裂、腐敗→教団改革の歴史ではないか。

～寛容な精神～

ある市民が次のように言った。「どの宗教も全て同じで、結局は同じ道を指し示しているのだ」と。この話を聞いた他の者が、「お前に何が分かるのだ？このような輩を生かしておいては神に対する冒瀆だ」と怒り罵り、結局は彼を殺してしまった。しかしこれは良くない。多くの宗教に共通するのは、聖典を解釈し、行為をもって深化させていくところであり、完全に理解したという事はその聖典の執筆者と同じか、崇拝している神の理解に等しいという事になる。そのように言われれば、「そんな事は恐れ多くとんでもない」と君は述べるだろう。つまり君は多分なる誤解釈に基づいて、物理的に他者を殺してしまったのである。殺された者の遺族は当然恨む。政治的闘争に神の権威を利用している場合も多かろう。

～修行林造営～

修行林非政非教なり。

政治を運営していくにあたって古来よりの教えを参考にしようという姿勢は極々自然なことだ。自身で信奉するところを取り入れ良い結果に繋げるようにしたい。

[聖典一例 イスラム教]

審判を嘘だと言う者を知っているか。

孤児を排斥し、

貧者に食事を与えることを奨励しない者。

（慈善の章 コーラン）

環境権について

環境権とは環境に配慮する、自然を残そうというものだ。

私は環境権の根底を仏陀の時代要するに自然豊かな過去世の環境に求めた。自由思想家全盛の時代であり、中国を見れば諸子百家、西欧でもまた然り。

豊かな自然環境と思想の成熟は何やら関係がありそうである。

西欧社会に決定的な影響を与えた聖書にも、

「園の全ての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

とある。木も生えないような不毛の大地（砂漠等）になってしまつては楽園が失われてしまつては困るという事で、環境権の根拠を見出し得る。環境権とはまさに西欧と東洋を繋ぐ架け橋となるべきもので基本的人権と定義出来よう。

環境権より、爆弾攻撃等での”自然破壊”行為が好ましくない事は明らかである。

以下に釈尊を修行僧の一つの形として環境権の考察を進めていこう。釈尊の成道とあるが、それはこの場合で仏陀をモデルにして議論しているからである。「釈迦に説法」…真理とは何ぞやと議論するのもおもしろい。

- 1 釈尊の成道と当時の釈尊の生存環境は一切関係ない
- 2 釈尊の成道と当時の釈尊の生存環境は関係ある

1は危険。我々は判断出来ないなので、よつて2が残る。

- 1 環境にやさしい技術ならばよい（風力発電とか）
- 2 環境にやさしい技術でも風力発電とか当時は無かつた

我々は判断出来ないなので、よつて2が残る。

…無知故に障らず、それならば当時の環境を出来るだけ忠実に再現・保存するのが修行林としては好ましい事になる。宗教的修行環境として2～3000年前と同環境の保全、修行環境利用の権利としての環境権を我々は有している。環境権とはそれゆゑに自然環境保

護そのものなのであり、自由保障享受権と言っても差し支えなく、修行林を示す。街に修行林を造営しよう。

注)

環境について述べているのであってその使用方法には言及していない（林環境が保全される範囲で、利用方法はあくまで自由であるべきだ）。

托鉢場 … 決められた場所。
性混在禁止区域 … 林の中に存在する。

性を差別しているのではなく区別しているだけ。

* 修行環境利用の権利とは、一般的に、如何なる宗教でも修行して一流の宗教者になるという事実から、特定の宗教に依存する性質のものではない事を再度強調したい。

～絶妙な処～

確かな処を打て。ならば力は蘇る。

…砂上の楼閣…

～遊び～

遊べや、遊べ。飽きたら止めよ。

…国民向けの話…

～お祝い～

「もっと確固たる所を祝おうではないか」

と誘われたら、恐らくある者は山を祭る祝い事を提案するだろう。動かざるなり。また、恐らく別の者は死生の祝事に関して言及するに違いない。全ての生き物に共通する間違い

無き事根本は、誰でも皆生まれてきたそして死ぬという事である。”だから”誕生日を祝うのではないか。出生時と葬式時及び周辺を見てみればその社会が分かるだろう。科学技術が発達した国は病院でただ死んでいくという場合も多い。誕生の際、盛大な祝い事があった赤子と全く無かった子を比べて、どちらの方が今後幸福そうか予測をつけることも出来よう。葬式も同様である。

確かなところへの祝い事が多かった → 幸福だろう（だったろう）

確かなところへの祝い事が少なかった → あまり幸福ではない（なかった）のではない
か

自分の計画も立てたらよいだろう。もし祝い事が少なかったと嘆くなら自分で祝うのも一興。自分で増やして補えばよいのだ。

例えば、

山岳信仰

復活祭（西欧、キリスト教。死生）

お不動さん信仰

…

様々な生があれば死がありそれが政治である。様々な生前と死後という話は別事。

～専守防衛という考え方～

軍事に関する事など野蛮で言及するに値せず、汚らわしい事だと清廉な君はそのように語る。返り血を浴びるなど何の利益にもならないと。なるほど、法理に適いもつともだ。それならば控えめに、おぞましい剣ではなく頑丈な鎧を、冷徹な戦車ではなく強固な城を造らせよう。ただ攻めて来ない事を祈るばかりである。

～人権とは何か～

定住し建てた家に財産を蓄える。政治とは彼と彼の財産を保護する事であるから、人権とは財産権である。自己財産を保護してもらい、そして他者の財産も奪われないようにするというもので、他人の保障がなければ自分の財産も奪われかねない。つまり人権とは繋がりを意味するものだ。与え施すのは古来より善道、脅し奪い取るのは悪道である。己の財産の保護は、善というわけでも悪というわけでもない。

完全に孤立した家に住んでいる場合は他人の財産を保護する義務はない。義務を果たしたので権利を得るわけであり互いの財産を保護し合うのである。その保護役割を代理人に委譲するわけであるが、この統治が強制的に発生したものであるにせよ、人権そのものを考察すると、政府統治者は必要なく”二者以上”が集まれば自然的に発生する権利と考える。それ故に神が与えた権利であるという風に特に神に根拠を求める必要も無い。つまりは政教分離、民主主義と何ら矛盾しないという事だ。では、ユートピアに唯一人で暮らしているならば、と考えると…。

動物や魚は人権を持たないが為に、命容易に奪われ、卵や蓄えた餌等の財産は保護されず弱肉強食の掟に従うのみである。

～キリスト教から導く政教分離と信仰の自由～

「赦し」「寛容」の精神より構成されるキリスト教では、当然、高度な赦し、寛容等が話題の中心となる。一方、政治では、違法行為の被害者は、損害賠償を求める権利を無理矢理に放棄する事を強要され、赦す、寛容になる必要はなく、それは逆に運営上害悪とされる。例えば不運にも窃盗事件の当事者となり、金を盗まれさらに赦しを与える事を法によって強制されるならば、それはもはや赦しではない。つまり強制が赦しを害悪たらしめ低次に貶めたと言える。強制しないという事は、赦し即ちキリスト教信仰の自由を保障するという事に他ならない。

～核兵器の非道～

核爆弾は人種差別の象徴であり自然環境破壊甚だしく、さらには住民を消し飛ばすゆえに大義何一つすらも無し。使用を認めない世界的雰囲気重要だ。

かろうじて生き残ったのは、
もうすぐに死ぬ女。
若さを誇っていた女は、
叫び狂い逃げ惑う。
焼け、爛れ溶けた顔に
涙を浮かべて。

～無心について～

”無心になれよ”とはよく言われる事だ。さて、無心とは何ぞや？

無心に関しては禅問答等を参考されよ。

考えてくれたかな？

答えの一形を以下に示す。

無心とは無政策の事である。

幼子の時は無心にて遊ぶ。

成人すれば無心にて政策を練る。

道の行き着く先を想像してみよう。本質たる所を一貫して継承している宗教は何ぞや？と、このように解すると道教は悪くない。若干政教分離に、“小国家”に関して誤解釈が生ずるかもしれぬ。限りなく小さくするという事に考えが至らぬかもしれぬ。分かるかな？政教非分離非非分離なり。仏法は良し。釈尊が自らの国家を捨て切って説いているので明快である。しかし、あくまでも私は直感しただけである事に注意されよ。仏法にしろイスラム教にしてもキリスト教にしろ（三大宗教の意）、なかなか私程度の考えが及ぶ所ではない。真理に精通している訳ではないゆえ。…これが無心の答えだなどとはゆめゆめ思わぬ事。

比較宗教とは政治哲学の帰結によって、中なる所から非作為非無作為によって導かれる宗教であり、無政策なれば特定の宗教政策へと偏らない。空無なり。中からというのは理解出来るかな？聖者が教えるならば自分の悟った所を与えるではないか？この点はよくよく吟味せよ。

西欧のキリスト教もイスラエル問題もあるが、基本的には天国探求の宗教であってこの世での富国政策が無いと解釈出来よう。どちらの宗教が優れているのかなどは政治哲学としてはどうでもよい事だ。非暴力で自由であればそれで良いのだ。違うかね？

政治哲学という王座から遠方を眺めたらそのような感じがするのであって、上記、“仏法は良し”を誤解しないように。「死後30万年間苦しんでもよいのでどうかこの世を楽しく快樂に浸って謳歌させて下さい」と主張するものの自由を保護するのが政治である。優しい配慮を施すのが政治である。自由を奪ってはならない。大き過ぎるので政府の対象ではない。

ゲームクリアと政治学 了